

## 「見えないものに目を注ぐ」

### コリントの信徒への手紙二 4章 18節

心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン 木村 太郎

先ほど朗読されました聖書の言葉は、パウロという人が書いたコリントの信徒への手紙二の一節です。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」。パウロはどのようなことを考えながらこの言葉を書き記したのでしょうか。

そのことを知る手がかりは、直前の言葉、「わたしたちの一時の軽い艱難(かんなん)は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます」(17節)にあります。ここから今日の箇所へと続いていきます。ですから、ここでパウロは「艱難」について考えていることが分かります。艱難とは困難です。ですから、今日の聖書の言葉で問題となっているのは、わたしたちが時に直面する困難についてです。

困難と感ずることは、人それぞれだと思います。他人が決めることではありません。そしてまた、それを軽いか重いか、その感じ方も人それぞれかと思ひます。いずれにしても、人生を進めていく上で困難を避けることはできません。しかし、その困難の一つひとつを通して、わたしたちは「重みのある永遠の栄光」、言い換えれば、重みがあり、地に足を付けた希望と共にある人生を歩んでいくことができる、聖書はそう伝えてあります。

少し話が逸れるようでありますけれども、神谷美恵子という精神科医がいました。長年ハンセン病に関わりつつ、様々な書物を著しました。その中の一つに『生きがいについて』という本があります。今から五十数年前に書かれたものです。その中で、神谷美恵子がこう述べているところがあります。「ほんとうに生きている、という感じをもつためには、生の流れはあまりになめらかであるよりはそこに多少の抵抗感が必要であ[る]。したがって生きるのに努力を要する時間、生きるのが苦しい時間のほうがかえって生存充実感を強めることが少なくない。ただしその際、時間は未来にむかって開かれていなくてはならない」(『生きがいについて』、24頁)。

「ほんとうに生きている、という感じをもつためには、生の流れ」、生というのは生きるという字ですけども、「[生の流れは]あまりになめらかであるよりはそこに多少の抵抗感が必要であ[る]」。わたしたちは本来、できることなら何かに躓いたり、挫折したくはありません。人生が波乱に満ちたものよりも、落ち着いて平和で「なめらか」であったほうが良いのです。にもかかわらず、生きていく上で直面する

様々な困難に対する「抵抗感」、つまりその困難の中で悩むこと、もがき苦しむことによって「ほんとうに生きている」と感じることができる。神谷美恵子はそう言います。なるほどと思うところがあります。

しかし一方で、穿った見方をすれば、これは困難というものを軽く見積もっているようにも思えます。なぜなら、「ほんとうに生きていると感じたいのなら、率先して困難を引き受けたい」、そのように聞こえるからです。いや、そうではないはずです。わたしたちは、数々の困難によって時に押し潰されそうになります。切羽詰まった状況に陥り、塞ぎ込みます。それらは、生きていると感じたいための何か、「生存充実感を強める」ための何かではないはずです。

しかし、神谷美恵子はこのことをハンセン病の人々との交流の中で書き記したのです。彼らはハンセン病を患っただけで家族や社会との関係を断絶させられ小さな島に隔離されました。彼らは絶望の先にいる人々でした。つまり、悩むことすら、もがき苦しむことすら止めてしまい、人生の「無意味感」に深く悩んでいる人たちであったのです(前掲書、5頁)。ですから、神谷はわたしたち人間が直面する数々の困難を軽視しているわけではありません。いずれにしても、わたしたち人間は数々の困難を通して「ほんとうに生きている」と感じる存在である、との指摘は当たっているように思います。しかし、悩み続けたくはありません。もがき苦しみ続けたくはありません。それが正直なところです。

そのためにはどうしたらよいのでしょうか。つまり、先ほどの言葉で言えば、どのようにしたら「時間は未来にむかって開かれてい」と信じることができるのでしょうか。それは、今日の聖書の言葉に示されています。「見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」ことを通してです。

まず、「見えるものは過ぎ去」るのです。人類の歴史というものは、見えないものを「見える化」してきた歴史と言っていいかもしれません。数多くの見えなかったもの、神秘的であったものが、科学的な知識や技術によって見えるようになり、また、見えるようになる努力が続けられています。身近な例で言えば、東日本大震災によって原発から漏れ出た放射線は本来目には見えませんが、それを可視化する一般向けのモニターなどができました。新型コロナウイルス感染症が猛威をふるった時期、飲食店には二酸化炭素の濃度検知器などが置かれたりし、空気の汚れ具合などが目に見えるようになりました。本来見えなかったものが見えるようになる。その恩恵に預かることは良いことであると言えます。

一方で、本来見えなかったものが見えることによって、深い悲しみが迫り、胸を痛めることがあります。日本から遠く離れたところで起こっていることが可視化されています。ロシアのウクライナ侵攻やハマスとイスラエルの争いを、ほぼリアルタイムで見ることができます。当地の悲惨な状況を知ることによって、国家や人間の罪の深さを突きつけられます。また、国内に目を向けても、少し違った視点かもしれませんが、見えなかった社会の闇が露わにされ、それはスキャンダルとして報道されます。連日そのようなニュースに接する時、幻滅し、失望します。それらは「見えるものは過ぎ去」ということでは

ないでしょうか。つまり、見えるものはわたしたちを本当に生かし、支え、励ますものとはなり得ないということなのです。

そのような現実の中で、聖書は「見えないものは永遠に存続する」と伝えます。言い換えれば、見えないものこそ、真の意味でわたしたちを生かし、信頼に値するものとなり得るということです。そして、聖書全体が証している目には見えないものとは、神という存在であり、その方の業です。それは具体的には、神が御子イエス・キリストをこの世にお遣わしくださり、十字架で犠牲にされ、しかし、同じ神はその十字架上で死なれた御子キリストを死より甦らせてくださったという出来事です。

聖書はこの目には見えない神という方にこそ、わたしたちを励まし、生かす力があると伝えています。つまり、神という存在にこそ、「時間は未来にむかって開かれてい」と信じる根拠があるということです。なぜなら、神は御子キリストを十字架上で見捨てることなく、その先に何も無いと思える死から起こすことを通して、死という究極の困難、挫折、行き詰まりを打ち破ってくださったからです。

わたしたちにはこれからも様々な困難が迫ってくると思います。その只中で、聖書の言葉を通して、神という目には見えない存在が確かにおられることを繰り返し確認していくことによって、重みがあり、地に足を付けた希望と共にある人生を歩んでいくことができるのです。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神よ、秋学期のこの学舎での営みの全てをお守りください。喜びと希望に溢れている者の上に、また、戸惑い悩みの中にある者の上に、あなたが等しく臨んでくださり、時宜にかなった支えと励まし、そして勇気をお与えください。これらの祈りと願いを、主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。アーメン。

2023年11月16日 聖学院大学全学礼拝